

# 助成年度：平成5年度

[所属] 九州大学 工学部  
[役職] 教授  
[氏名] 萩島 哲 (出口 敦)

[課題]

## 浮世絵風景画の自然景観を生かした環境設計の手法について

－自然景観の分類－

[内容]

本研究は、自然景観を主に据えた歌川広重の代表作である「東海道五十三次」(1833～1834)の55点、溪斎英泉と歌川広重合作の「木曾開道六十九次」(1838頃)71点、合計126点を分析の対象とし、広重らが描いた「絵になる風景」から具体的な環境設計の操作指標を求めることを長期的な目的としている。広重らの描いた126点を分析素材として、水の量、緑の量の特徴を調べた後に、風景画の画面での距離景の検討を行い、ついで環境設計で必要となる景観分類を明らかにすることにした。

研究結果を要約すると以下の通りである。

(1)湖、海の景では、俯瞰景が多く、視点場は、水際まで移動することはない。河川では、多様な機能が描かれている。そこでは、生活用水としての水景等親水性に溢れる様子が描かれている。

(2)緑の景では、並木、屋敷林、宿場の出入口に配した樹木等、緑が実用的機能をもっていること、同時に、樹木を額縁的に画面の左右に配した景観的機能をもつ様子も描かれている。

(3)描かれた人物による距離景の分析によると、従来の距離景に加えて超近景が見いだされた。つまり超近景、近景、中景、遠景の4つの景である。超近景は20～30m、近景と中景の区切りは100～200m、中景と遠景の区切りは、600～800mである。

(4)景観の基本的構成要素とは、『山』『平野』『海』『河川』『湖』『道』の各要素があげられる。

(5)風景画の構図としては、以下の8つの典型景観を得た。

①平野部に河川のある風景：平野部を舞台として河川と道、中景に集落、そして遠景に山を配した景観である。

②平野部に道のある景観：平野部を舞台に、道が配された景観である。この景観は、第1に、並木道が近景から中景まで連続して配され、田園の中に街道をパースペクティブに見る「軸景」、第2に、平野部の街道沿いにある休憩所となる大木を道路方向と直角に見る「正面景」の2タイプに大別される。

③山間部の街道の景観：近景に山道、中景から遠景に山が配置され、山間の峠に向かう街道の景観である。

④海辺の景観：丘または山の中腹から海を見下ろす俯瞰景である。

⑤街中の景観：市街地の祭や、広幅員の街道上の賑わいのある景観である。

⑥道と建物の景観：超近景、近景に広い道を配し、両側に建築群を配した宿場内街道のパースペクティブな景観、代表的な道路の軸景である。

⑦河原の景観：近景から中景にかけて河原と大河川を俯瞰し、中景に森林、遠景に山を見る景観である。

⑧湖を見下ろす景観：山の中腹またはその付近を視点場として湖を見下ろす俯瞰景である。

これらは、日本の地形を反映しており、環境設計を行っていく上で参照出来る基本的な分類である。